

第35回「東書教育賞」の 審査を終えて

審査委員 市川 伸一



この栄えある授賞式に全国からお出でになった先生方、本当におめでとうございます。本来でしたら審査委員長の谷川先生より審査の講評をいただきますが、今年は私、市川が代行して、審査の取りまとめをさせていただきました。

まず、私もこの数年論文の審査に関わらせていただきましたが、時代の流れというものを、今回は特に感じました。一つは、新学習指導要領が小学校ではこの4月から、その1年後には中学校でも全面実施になります。その新学習指導要領と関連の深いテーマが、今回の応募論文ではかなりありました。特に、「主体的・対話的で深い学び」というフレーズを意識したものが多かったと思います。

もう一つの特徴は、特定の教科、単元の指導法に関するテーマは応募論文の中でいつも多いのですが、今回、それだけではなく、教科に限定されない今日的なトピック、あるいはテーマというものが増えてきたように感じました。例えば、防災や環境、地域、キャリア教育、また、自己と他者の関わりというようなテーマが増えてきているように思いました。社会的に関心の高いものがテーマになっているように思います。

こうなってくると、これは審査委員会の中でも話題になったことですが、一人の教員の実践にはとどまらなくなってきました。例えば教員間の連携や、地域や自治体、教育委員会との連携、協力関係というものがあってこそ初めてできる教育

実践ということになってきます。しかし、応募論文では、基本的には先生それぞれが単名で執筆して応募するという形式になっていることがほとんどです。場合によっては、これからはこうした形式も再検討をしていく必要があるかもしれません。コラボレーションということが、教育界でもかなり盛んに行われるようになっていきますから、応募の仕方というものも今後多様になってくるかもしれません。このことは、ひいては、東書教育賞の論文の在り方、さらに教師の在り方というものにも関わってくるかと思いました。

個々の優れた実践を追求していくことは、もちろん教師あるいは教育の一つの方法ですが、これからはコーディネーターとしての教師というのでしょうか、地域とのいろいろなリソースであるとか、自治体、教育委員会、あるいは大学であるとか、そうした様々な関わりの中で、それらをうまく結集し、つなぎ合わせていく教育実践も増えてくるだろうと思います。

教育の中では、このようにいろいろなバリエーションがあっていいわけです。これまでの一つの大きな教育の流れを包み込むような形で、先生方にはさらに実践を豊かにしていただきたいと思います。そして、この東書教育賞に応募していただけると、おそらく先駆的な実践として、全国の先生方に大きな刺激を与えるものとなるのではないかと、また、日本の教育を変えていく力になるのではないかと思います。その意味で、今回のご

応募において、特に受賞された先生方には素晴らしい教育実践を提供していただきまして、本当

にありがとうございました。私からのごあいさつとさせていただきます。

ICTに関わる 論文の総評

審査委員 赤堀 侃司



受賞された先生方、おめでとうございます。私のほうでは、ICT部門の講評になります。後で、東原先生が具体的にお話しされると思いますが、まず、小学校優秀賞受賞の中村めぐみ先生、おめでとうございます。また、中学校優秀賞受賞の中西一雄先生、おめでとうございます。お二人の論文は極めて優れていると、私は個人的に思いました。まず、中村先生の論文では、プログラミング教育について、プログラミング教育は今年4月から小学校で必修になりますが、日本のプログラミング教育の難しさ、また、素晴らしさの両方があるのですが、「教科における」という修飾が付いています。諸外国では、プログラミング教育というのは、独立した教科、あるいは科目になっていることが多いのです。しかし、日本の場合は、「算数における」とか「国語における」、「理科における」という、教科とリンクしているところに特徴があり、これが非常に難しい。なぜかという、両方の目標を達成しなければいけないからです。一言でいうと、これはクロス・カリキュラムです。クロス・カリキュラムということは、どうしてもそれをカリキュラム・マネジメントせざるを得ないわけです。それを中村先生の論文では見事に実践的

に、また体系的につくりあげられてあり、極めて優れていると思いました。

また、中西先生のキャリア教育では、特に中西先生はiPad教材をご自身でつくられているということが素晴らしい。私もURLで実際にアクセスさせていただきましたが、見事だと思いました。いろいろなところで先生のお名前はよく聞かせていただいておりますが、この忙しいときによくおつくりになったと思います。たぶん、生徒から人気があるのではないかと私は思いました。

それから、小学校奨励賞奥沢先生の論文では、特別支援教育の中でICTをうまく活用されています。音声ペンを使われての実践で、実は私は音声ペンというものを知らなかったのですが、ペンに録音機能とスピーカーが付いていて、マイクロSDカードのようなものが入っていて、このペンで音声を録音できるしスピーカーで音声を出すこともできるという、極めて優れたものです。これを特別支援教育に使われ指導された。私はその仕組みはよく分からないのですが、シールというものがあって、自分が録音した声、音声を、紙のシールにリンクさせることができ、ここがオリジナルだろうと思うのですが、それはシールですか

ら、いろいろなところに貼って音声を出すことができるわけです。特別支援教育において、例えば自分が話をしたり、文字を読んだりするのが苦手な子どもが、自分が録音したシールを必要な箇所に貼っておいて、そのペンでタッチすれば、ペンの中のSDカードとリンクしていますので、そこから録音されている自分の声が聞けるという、紙が音声に変わるという、まさにデジタル時代の道具ですね。それで、話すのが苦手、読むのが苦手な子どもたちでも、どんどん自信をもって元気になるというわけです。それで「自分は表現できるんだ」ということを体感していくことができます。非常に感動的なICTの活用だと思いました。

もう一つ、同様に特別支援教育の中で実践された先生がおられました。こちらもプログラミング教育なのですが、VISCUIT（ビスケット）という優れたコンピュータ言語があります。これは原田さんという日本の方が開発されたプログラミング言語なのですが、言語といっても通常のコーディングというかテキストでやるのではなく、子ども用に、絵で描くのです。メガネがあって、立ち上げるとメガネが出てきて、一方のメガネに、例えば魚でもなんでもいいですが何かを描いて、一方のメガネにはそれをどう動作するかを書きます。例えば、「こっちに動け」とか「2匹増やせ」とかですね。つまり、人というのは、「なにを・どうする」という考え方があるわけですから、「魚を・動かせ」みたいなものをメガネで表現し、クリックすると別のウィンドウでそれが実行されて魚が動きます。

これが、子どもの表現力をものすごく高めるのです。自分のやりたいこと、自分が思ったことを、人は誰でも表現する力があるのです。

Scratch（スクラッチ）を開発した、レズニックというMIT（マサチューセッツ工科大学）の有名な認知科学者がおられます。彼はなんと言ったかということ、「子どもはものすごく可能性があるのだ

から、表現ツールをもっと与えようじゃないか」と。「スクラッチという言語を通して、自分をもっと言いたいことや、やりたいことを表現させるのだ。だから自分はスクラッチをつくって、マイクロビットか何かにリンクさせれば、もっともっと子どもたちは表現できるはずだ。今の教育は子どもたちにふたをしているような感じがする。ふたを取れ。そうすればもっと子どもたちに力が付くはずだ」といったような講演を聞いたことがあります。そのとおりだと私は思いました。だから、この論文でも、メガネという道具を使って、特別支援の子どもたちがどんどん自分というものを表現し始めていったというそのプロセスが、私にとっては非常に好感をもてた内容でした。

先ほど、千石社長がおっしゃったように、今、国を挙げてのGIGAスクール構想があります。これが何を意味しているのかというと、私が思うのは、ICTはこれまでは道具でした。しかし、人は道具によって変わってきます。子どもたちは道具によって認知が変わり、行動までもが変わってくるのだということだと思います。このICT部門に投稿された論文はそれを見事に物語っているような気がしています。

これからはテクノロジーが否応なく入ってくる時代になると思います。そのテクノロジーを上手に使う。間違っても使えばこれははじめの道具になってしまいますから、正しく使うにはどうしたらいいかということ、情報活用能力を生かして学んでいかなければなりません。情報活用能力は、新学習指導要領では、言語能力、問題解決能力と並んで、上位の基盤となる資質・能力であるといっています。その点で、論文審査において新しい時代に向かったいろいろな論文を読ませていただき、私自身はすごく勉強させていただきました。お礼を申し上げたいと思っております。

受賞された先生方、本当におめでとうございます。

審査委員

露木 昌仙



審査員の露木昌仙です。受賞された先生方、誠におめでとうございます。新学習指導要領が4月から全面実施されます。「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業改善ということが総則改訂の要点の一つですが、どの実践においても、このことを意識して行われていることがたいへん素晴らしいと感じております。

さて、私は小学校教育に長く関わってきた者ですので、小学校で最優秀賞とられた、愛川町立中津第二小学校の菊池崇徳先生の「オリジナル合唱曲作りを通した主体的・対話的な子供の育成(総合的な学習の時間)」の実践について、所感を述べさせていただきます。

課題解決を主軸とした協働学習を総合的な学習の時間として設定することができないだろうかというところからスタートした実践であるということです。合唱曲のテーマを投票で決める。「歌詞のかけら」を考える。短い歌詞を自分で考える。グループで意見交換する。全員が意見を投票し、全てのアイデアを50音順に整理し一覧を配布する(自分の考えも載っている)。3、4人で一番の歌詞を作成する。等々の活動が進められていきます。

論文を読ませていただいて、子供たちの活動が楽しそうだなということを感じました。このように面白い活動なら私自身も指導あるいは参加者として「やってみたいな」と思えるほど、子供たちが主体的に活動している様子が伝わってきました。子供たち自身が合唱曲作りの進捗状況を

把握し理解していることを感じました。

写真ですから十分にはとらえられないのですが、グループ活動の写真には、笑顔が溢れ、対話的であたたかな雰囲気が確かに見られます。

また、このように主体的・対話的な子供たちである背景には、先生と児童、児童と児童の間に信頼関係が出来上がっていて、子供たちのやる気を高めているとも感じました。

ここまでですと、素晴らしい実践でとどまるのですが、保護者向けの「ひとりじゃないから」の演奏で感動を与えたり、神奈川フィルハーモニーオーケストラの「子どもたちの音楽体験事業」(2018.1.29)でこの曲を演奏していただいたり、地域の合唱団でも歌いたいと言われるなど、地域にも反響を及ぼし、最後には学校のオフィシャルサポートソングとして、中津第二小学校で歌い継がれる「ひとりじゃないから」を作り上げ、子供たちが素晴らしい成就感を味わえていることが何より素晴らしいと思いました。

審査委員

壺内 明



先生方、おめでとうございます。今回受賞されました先生方は、新学習指導要領の全面実施を目前にした重要なキーワードである「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」などの課題にチャレンジし、まさに令和時代の教育の在り方を見据えて、素晴らしい成果を上げて

いただきました。

私からは、中学校の部で最優秀賞を受賞された愛知県立杏和高等学校の清水康太先生の教育実践研究について講評並びに感想を述べさせていただきます。

清水康太先生、おめでとうございます。先生は、前任校の稲沢市立稲沢西中学校での保健体育科の授業を通して、テーマを「主体的に技能向上に取り組む体育学習の創造」と設定して実践研究に取り組みました。体育の短距離走・リレーの授業でアクティブ・ラーニングの考え方を取り入れ、主体的に活動できる授業の在り方や単元開発に取り組まれた素晴らしい実践研究であります。

アクティブ・ラーニングの考え方を取り入れる場合の陥ってはいけない三つの授業展開をしっかり把握して授業改善を推進しました。実践研究のスタートに当たっては、短距離走とリレーにおける生徒の実態を詳しく分析し、生徒一人一人の問題点を洗い出し、研究のねらいと研究仮説を設定して取り組みました。「より速く走り、より速くつなぐ」ために、目指す生徒像を掲げ、短距離走とリレーを主体的に、かつ深く学べるように工夫・改善を凝らしています。短距離走ではパタパタくんやミニハードルなどの補助具や教具の活用、ドライブジャンプやペットボトル奪取などの学習方法や場の設定の工夫をするとともに、リレーの練習では技能向上の七つの重要な鍵（キー）の指導、20m鬼ごっこやバトンレースなどの学習方法や場の設定など、オリジナルな創意工夫が如何なく発揮されています。さらには、仲間との対話を重要視し、「試してみたい」と考えて運動する「試行」とそれをもとに考える「思考」の二つの「しこう」を繰り返し行えるような条件整備を図り、多くの成果を上げられました。

研究仮説の検証方法では、①50m走とリレーの記録の解析、②形成的授業評価、③実践前後のアンケートの比較検証、④抽出生徒の変容、などを詳細に検証しながら実践授業に取り組んだ姿勢は私たちの心を打つものがあり、生徒た

ちの「よしやるぞ!!」という意欲が十分に伝わってきた実践研究であります。

短距離走の実践では、授業のはじめに「ドライブジャンプ」や「腕振り」「クラウチングスタートの姿勢」づくりなどで十分な指導と補助具を有効活用しています。「走る姿勢」づくりでは、筋伸ばし棒の活用やサーキットダッシュ、50mトライアルなど、主体的に繰り返し練習できる場の設定を工夫されました。また、タイムをこまめに計測し、速く走るための話し合い活動などを数多く組み込み、学びを深めていく活動が展開されています。

リレーの実践では、短い20m走を5人で走り、何度でも練習できるように工夫しました。同時にタイムを計ることによって、生徒の中から自然とかけ声やバトンの渡し方までの改善がでるようになりました。最終段階での「しこう」の時間では、リレー競技に欠くことができない「走る順番」から「ダッシュマーク」までの「7つの鍵」が生徒一人一人に浸透し、授業自体を生徒が創り上げる段階まで成長したことが最大の成果ではないかと受け止めております。

短距離走とリレーの実践授業での試行と思考の二つの「しこう」を駆使したアクティブ・ラーニングによる授業改善は、今後ますます重要性を増すことは確実であります。

どうぞ、多くの時間とご苦労があると思いますが、今後ともこのような実践研究を保健体育科の各単元で実現できますよう期待しております。本日は、誠におめでとうございます。

審査委員

武内 清



小学校の部の優秀書を受賞されました近藤修史先生の「どの子どもが『わかる』『できる』を成立させる指導法の工夫・改善」について、ご紹介させていただきます。大変優れた実践・研究だと感心致しました。

近藤先生の実践は、小学校の1年生の算数の授業で、「段階的指導を生かす」と述べられていますが、一斉指導でつまずいた児童を見つけ出し、次にその子らに学級内で補助的な指導をして、さらに授業外で個別指導(全11回)を行う。そしてそのつまずきの軽減に有効だった個別指導の方法を、一斉指導にも持ち込むというものです。この個別指導と一斉指導の連携が大変意義があり、優れていると思えました。

子どもたちが学習でつまずくのはかなり個性があり、一般的なつまずきの理由では説明できないことを、個別の観察で見出しています。個々のつまずきに対応した有効な指導方法を探索しています。その個別指導で有効な方法を一斉指導に取り入れています。

境界線の学習障害の子どもや脆弱(vulnerable)な子どもが多い中で、この方法はとても有効だと思います。脆弱な子どもほど外部の変化に敏感です。別の言い方をしますと、特別支援の指導の方法を、通常学級でも用いることが有効だということです。

近藤先生の実践・研究は、これまでの算数障害や発達障害に関する研究の成果を参照したう

えで、その先のことを理論と実証面で探求しています。仮説を立てデータで検証するという科学の手順をきちんと踏んでいます。実践的にも学習のつまずきに対応した、また子どもを飽きさせないさまざまな工夫(実物と数字の対応、クイズやペア活動、ワークシートの活用等)をしています。全国の模範となる実践、研究だと思いました。受賞、おめでとうございます。

審査委員

鳥飼 玖美子



受賞なさいました先生方、本日は本当におめでとうございます。私は小学校優秀賞受賞の古田直之先生の、札幌市開成小学校での取り組みについて、感じたことを述べさせていただきます。この論文は、「過去を未来につなげる力を育む授業の創造」ということで、防災学習を通してそうした力を培うという論文です。

私が驚きましたのは、札幌市ということで、北海道胆振東部地震があった直後に、古田先生はこの学習計画を練られたということです。それも、ご自身の担当なさっている科目だけでなく、社会科と国語科、そして総合学習と、教科横断的にカリキュラム・マネジメントを行っておられます。短期間に、大変なときにこれを行ったのは、相当な柔軟性をもって取り組まれたことだと感心いたしました。

これは論文にも書かれていますが、子どもたち

も大変なときで、大丈夫かなと思いつつも、「今だからやるのだ」と、むしろ記憶が鮮明なときに、あえて当事者意識をもって防災について学んでもらうということで、常識的に考えるとそんな大変なときだと思いますが、それを実践なさいました。

おそらく、学校をあげてこの取り組みに協力したのではないかと、という雰囲気も感じられるのですが、そういう弾力性のあるカリキュラム・マネジメントというものが、一つのモデルケースになると思いました。その防災学習は、ただ子どもたちに大変だった感想を述べさせようということではなく、KJ法的に、子どもたちに、どういうことが大変だったかということ話をさせて、それを全部黒板に貼って、分類していったわけです。その分類も、例えば揺れがどうだったか、そのことによって電気がどうなったか、交通がどうなったか、それから食べ物に関しての問題、健康についてと分類をしていって、その分類を今度は統合していく作業を通して、子どもたちに考えさせています。

これは、論文の中であえてそういうことはおっしゃっていないのですが、私はまさしく学習指導要領でいっている、主体的であり、そして子どもたちに話をさせていくという点で対話的であり、そしてそこから考えさせてまとめていくという力を通して深い学びにつながっていると思います。

これを今度は発表するというので、表現力にも心を砕いておられます。その表現力というものも、単に発表させるだけでなく、分析して統合して得たものについて、今度は子どもたちに自分たちで新聞記事を書かせ、その書いた新聞記事をもとに発表させ、自分たちのこれからの防災はどうあったらいいかということ、聞いている人に伝えるという試みも取り込んでおられます。これは、防災学習についての投稿論文はかなりありましたが、その中でも非常に参考になる事例だと思いました。

今、防災は非常に世界的に重要になっていまして、日本だけの問題ではありません。国連も、この気候変動については放っておけないということで会議を開いておりますし、ご存じのようにグ

レタ・トゥンベリさんという高校生が世界に広げるような活動も起こしています。もはや、“climate change (気候変動)”ではなく“climate crisis (気候危機)”だということで、ダボス会議においても大きなテーマとなっています。

ですから、日本においてもやはりこれから、あつてほしくないけれども、災害は避けられないかもしれない。そういう中で、どのようにこの気候の危機に対応し、そして未来へ向けて人類の持続可能な開発をどう進めていくか、人類の未来を考えたら、やはりおのずから、どのようにしたらいいかを考える時期に来ているわけです。

この論文は、子どもたちには本当に直近の過去だったわけですが、そこにとどまらずに、これをどうやって未来につなげていくかという目標をきちんと設定して学習を行ったという意味で、非常に優れた論文だと私は感銘を受けました。こうした防災学習もあるのだという一つのモデルケースとして、学ばせていただきました。本日は本当におめでとうございます。

審査委員

東原 義訓



私のほうではICT部門のお二人の先生の論文の講評をさせていただきます。小学校優秀賞受賞の中村めぐみ先生、おめでとうございます。

中村めぐみ先生とこの会場でお会いするのは2回目でしょうか。3年ほど前にも来られたかと思

います。今回は、中村先生のご自身の実践を論文にされて賞を取られました。今日は後ろの方につくば市の教育長もおいでなのですが、今回の論文は、つくば市として受賞され、代表として来られているという意味合いがあるのではないかと思います。

論文の審査員をさせていただいておりますと、論文応募のリピーターの方がとても多く、「なるほど、この先生はいつも上手に書かれるな」とか「いい研究をされているな」「ずっと継続してなさっていらっしゃるな」と感心することが多いのですが、中村先生の今回の研究は、個人の研究から地域の研究に発展なさったところに非常に大きな意味があると思います。

今日のこの受賞の様子が、市のほうに帰って報告されますと、「ああ、頑張ってよかったな、市が応援してくれているんだ、また頑張ろう」と地域の学校の先生方が思ってくださいと思います。そういう雰囲気といいますか、非常によい関係をつくりあげていらっしゃいます。

だから私は、論文のタイトルは「カリキュラム・マネジメント」ですが、これは「教育行政マネジメント」というくらいのもっと大きなテーマで賞を取られたのではないかと思います。

つくば市では、すべての学校のすべての先生がプログラミング教育を指導できるように、「必修」というような言葉まで使って実践されています。それが成し遂げられるように市のほうでも様々な手立てを取ってバックアップしています。

プログラミング教育をこれからどうしたらよいかということ、どこの地域でも課題になっていることかと思いますが、つくば市の実践を端的に知るためには、今回の論文をご覧くださいということがよいと思います。

また、1週間くらい前に、文部科学大臣がつくば市までICT教育の視察に行っています。こうしたことも、なるほどこれだけ市が力を尽くし、また、先生方も頑張っているからなのだ、という理由がよく分かった論文でした。

次に中学校優秀賞の中西一雄先生、おめでとうございます。中西先生の論文は、キャリア教育というものが、コンテンツといいますか、領域としては重要なポイントになっています。なかなかキャリア教育というのは難しく、行にくいものかもしれませんが、それを「こんな形でできますよ」という非常に参考になる実践を示していただきました。ぜひ真似していただくのではないかと思います。

今回の論文では、使っていらっしゃる機械はiPadなのですが、Windowsを使っても、あるいはChromebookを使っても、クラウドさえ使えば真似のできる実践を示された、非常に汎用的なものです。

中西先生が特に工夫されているコンテンツというか、ワークシートといいますか、そこには様々な教材がありますので、そこが特異な点であると思いますが、アイデア的には、他の学校でも非常に参考になるもので、このまま真似をしていただければいいのではないかと思います。GIGAスクール構想により、これからは一人一台のPC環境になっていくという話です。そういう環境になったときにどう使ったらよいのだろうかという話になったときに、ぜひ中西先生の実践をご覧くださいと言われると思います。

私たちが普段使っているワープロ機能や、表計算機能、プレゼンテーション機能にあたる機能を、子どもたちがどんなふうに学習や活動の中で使ったらよいか示されています。しかも、クラウドを活用して同時に編集しています。例えば隣で入力されたものを、自分の画面を見ながらそれに追記したりする。または、隣の人の書いた文章に刺激されて、私も「うん、頑張ろう」みたいな感じで新しく文章を書いたりすることができるというように、子どもたち同士の刺激合いがとてもうまくいくわけです。

アンケートを取って整理もさせていただいておりますが、学習の成果がこれからの未来に生きて働くように、協働的な作業を行うことはキャリア教育の観点で必要となってきます。他の人と協働

してものごとを成し遂げていくことに対する子どもたちの意識に大きな影響を与えたことは大きな評価につながりました。

私はお二人の研究をどちらも「真似しましょう」と強く申し上げて、お祝いの言葉にさせていただきます。おめでとうございます。